

幼児の発達のとらえ方に関する研究

－（１）大学生と保育者の比較－

今井靖親・佐藤三奈・森田健宏
(心理学教室)

A Study on Comprehension of Early
Childhood Development (1)

Yasuchika IMAI, Mina SATO and Takehiro MORITA
(Department of Psychology)

要旨： 3歳児と5歳児の心身の発達（①運動領域、②認知領域、③社会性領域）について、大学生（1回生と3回生）と保育者（幼稚園教師・保育所保母）がどのようなとらえ方をしているかが比較された。

その結果、①運動領域と③社会性領域においては、3歳児、5歳児とも、保育者のほうが大学生よりも幼児の発達を高いレベルでとらえていることが明らかになった。しかし、②認知領域においては、3歳児、5歳児とも、保育者と大学生の間に差は認められなかった。これらの結果をもとに、幼児の発達のとらえ方が大学生と保育者とで、なぜ異なるのかについての議論がなされた。

キーワード： 幼児、発達のとらえ方

一般に、受精卵の発生から個体の死に至るまでの心身の質的および量的変化を発達と言ひ、狭義には、青年期に至るまでの上昇的变化をさすが、広義には、老年期に向かつての衰退的变化を含んでいる（教育出版 多項目 教育心理学辞典）。乳幼児期は、思春期（あるいは青年前期）とともに、変化の様相とスピードという点で、生涯を通じて、発達が最も顕著な時期であるから、乳児保育とか幼児教育に携わる者は、その対象である乳児や幼児の心身の発達について、年齢、性、個人差などの特徴を常に正しく把握していることが必要である。

新しい幼稚園教育要領の解説と教育課程編成・実施上の参考資料として刊行された幼稚園教育指導書（文部省 1988）などからも伺えるように、最近では「発達に即した保育」の重要性が強調されている。たとえば同書の31～35ページのわずかに5ページに、次に示すような「発達」というキーワードが、合わせて20か所も使われている。

「幼稚園は意図的な教育を目的としている学校であるので、幼稚園教育の目的、目標を有効に達成するために、幼児の発達を見通して、それぞれの時期に必要な教育内容を明らかにし、計画性のある指導を行う場でなければならない。」（アンダーラインは筆者による。以下同じ。）

「各領域に示されているねらいと内容は、……幼児の発達の側面を採り上げた「ねらい」や「内容」であり、幼稚園教育の全期間を通して育てるものである。」

「具体的なねらいと内容を組織するに当たっては、まず幼児がどのような発達をしていくかと

いう発達の過程をとらえる必要があり、それぞれの発達の時期において、幼児は主にどのような経験をしていくのか……を各領域に示す事項に基づいて明らかにしていく必要がある。」

このような例からもわかるように、幼児教育の目的達成、教育課程の編成、「ねらい」や「内容」の組織、日々の保育の実践など、すべてが乳幼児の心身の発達（特にその過程や実情、時期）に即したものであることが要請されているのである。

ところで、幼児の発達を正しくとらえるためには、可能な限り客観的な規準に依ることが必要であるが、1954年に日本保育学会は、保育の基礎となる発達規準を作成する目的で全国的な調査を行っている。これは、3歳、4歳、5歳、6歳の幼児4000名を対象に、運動的発達、知的発達、情緒的発達、社会的発達の4領域について詳細に調べたものであった（日本保育学会 1963）。その15年後の1969年、日本保育学会は7320名の幼児を対象に、再び前回と同様な全国調査を行い、新たな発達規準の作成を試みている（日本保育学会 1970）。前後2回の調査において、年齢や性による差のほかに、領域ごとに15年前のほうが発達のには優れている項目が少なからず見いだされた。これには、前の調査データが主として母親への面接によるものであったのに対して、後の調査データは主として保育所保育と幼稚園の教師による質問紙への記入によったことが影響していると思われる。しかし、15年を経たからといって幼児の心身の発達が必ずしも前進的ではないこと、母親と保育者とは同じ年齢の幼児の発達のとらえ方が異なっていることを示唆している点で興味深い。このことに関連して、最近、杉山（1994）は、3歳児の運動性、認知性、言語性、情緒性について10年間の発達を比較し、大人がやり方を教え、本人も繰り返し体験を重ねてできるようになるものや、競争心などの社会的感情の発達は早くなっているが、ルールを理解し、見通しをもってしばらく我慢する力は弱くなっている傾向にある、と報告している。

そこで、本研究では、大学生（幼稚園教員養成課程で既に幼児教育に関する専門科目の多くを履修し、幼稚園における教育実習を終えている3回生と、入学後6か月を経ているが、まだごく限られた専門科目しか履修していない1回生）と保育者（幼稚園教師および保育所保育）とでは、幼児の心身の発達程度のとらえ方にどのような差異があるかを比較検討する。

方法

調査対象 奈良教育大学幼稚園課程1回生28名、3回生29名、大阪府・奈良県・兵庫県の公私立幼稚園教諭・保育所保育20名

材 料 日本保育学会が1954年と1969年に実施した幼児の心身発達についての全国的調査の領域と項目を参考にして選定した3領域（運動、認知、社会性）各20項目、合計60項目からなる調査用紙。なお、日本保育学会の1954年、1969年の調査では、情緒の発達領域についても検討されているが、調査項目の表現と結果の処理に問題があると思われたので、今回のわれわれの調査からは除外した。

手 続 き 大学1回生、3回生、幼稚園教諭・保育所保育母に対して調査用紙を配布し、記入後に直接または郵送により回収した。

記入の際に、まず満3歳と満5歳の幼児を想定してもらい、調査項目に記述されているさまざまな行動がどの程度できるかについて判断を求めた。そして、①「ほとんど（90%以上の子が）できないと思う」、②「あまり（70%くらいの子が）できないと思う」③「だいたい（50%くらいの子が）できると思う」、④「かなり（70%く

らいの子が) できると思う」、⑤「たいてい(90%以上の子が) できると思う」の5段階評定による記入を求めた。

結果と考察

5段階評定によって得られた回答をそのまま粗点として用い、領域ごとの得点を合計した。従って、各領域とも得点の範囲は20~100 となり、得点が高いほど当該の年齢(満3歳、または満5歳)において、「多くの子どもができる」ととらえていることを表す。

幼稚園教諭・保育所保育母(以下、保育者と略記)と大学1回生、大学3回生(以下、1回生、3回生とのみ略記)について各領域ごとの平均得点および標準偏差を表1~3に示した。

表1 運動領域についての平均得点及び標準偏差

	1回生	3回生	保育者
3歳児	53.25(15.40)	50.07(9.81)	59.55(10.41)
5歳児	85.89(10.30)	88.17(6.48)	94.10(3.26)

()内の数値は標準偏差

表2 認知領域についての平均得点及び標準偏差

	1回生	3回生	保育者
3歳児	52.64(15.90)	46.59(7.89)	48.35(10.76)
5歳児	81.00(10.72)	81.38(6.84)	80.55(6.54)

()内の数値は標準偏差

表3 社会性領域についての平均得点及び標準偏差

	1 回生	3 回生	保育者
3 歳児	51.57 (16.46)	46.86 (11.68)	56.30 (8.66)
5 歳児	81.96 (10.37)	81.62 (6.82)	85.35 (8.73)

() 内の数値は標準偏差

1. 運動領域の発達について

表1に基づいて、2 (年齢: 3歳児、5歳児) × 3 (対象: 1回生、3回生、保育者) の分散分析を行ったところ、年齢の主効果、対象の主効果とも有意であった。それぞれ $F(1,74)=907.19$, $p<.01$; $F(2,74)=5.64$, $p<.01$ 。しかし、年齢と対象の交互作用は有意ではなかった。

年齢の有意な主効果は、全体に3歳児よりも5歳児のほうが運動面の発達が優れているととらえられたことを示す。次に、対象の主効果が有意になったので、 $Mse=165.38$ を用いて下位検定を行ったところ、保育者と1回生の間、保育者と3回生の間に、それぞれ有意差があった (保育者と1回生: $t=3.86$, $df=74$, $p<.01$ 保育者と3回生: $t=4.12$, $df=74$, $p<.01$)。しかし、1回生と3回生の間には有意差がなかった。上記の結果は、3歳児についても、また5歳児についても、保育者のほうが学生よりも幼児の運動面の発達を全体的に高い水準でとらえていることを示している。

図1には、幼児の運動面の発達を保育者や大学生がどのようにとらえているかをプロフィールで示した。3歳児についての全体的傾向をみると、「かなりできると思う」という発達段階の項目は全くなく、「あまりできない」か「だいたいできる」程度でとらえられている。その中でも比較的「かなりできる」に近いのが、②「絵本を一枚ずつめくる」と⑦「三輪車をこいで動かす」であり、逆に、「あまりできない」に近いのが、⑥「爪先立ちで歩く」、⑫「ひもを片結びに結ぶ」、⑭「片眼だけつむる」、⑰「三角形を手本を見て描く」、⑱「ひし形を手本を見て描く」、⑲「でんぐり返しをする」、⑳「スキップをする」などの項目である。次に5歳児についての全体的傾向をみると、全項目が「かなりできる」、「たいていできる」という発達段階でとらえられていることがわかる。

なお、各項目ごとに、保育者・1回生・3回生の平均得点を比較してみたところ、統計的に有意差 (5%水準、1%水準) のあった項目は次のとおりである。

3歳児: ④「ハサミを使って紙を切る」(保育者>3回生)、⑤「ソックスを一人ではく」(保育者>1回生=3回生)、⑥「爪先立ちで歩く」(保育者>1回生=3回生)、⑬「円を真似して描く」(保育者>3回生、1回生>3回生)。

5歳児: ⑦「三輪車をこいで動かす」(保育者=1回生>3回生)、⑪「片足立ちをする」(保育者=1回生>3回生)、⑲「でんぐり返しをする」(保育者>3回生)。

2. 認知領域の発達について

表2に基づいて、2 (年齢: 3歳児、5歳児) × 3 (対象: 1回生、3回生、保育者) の分散

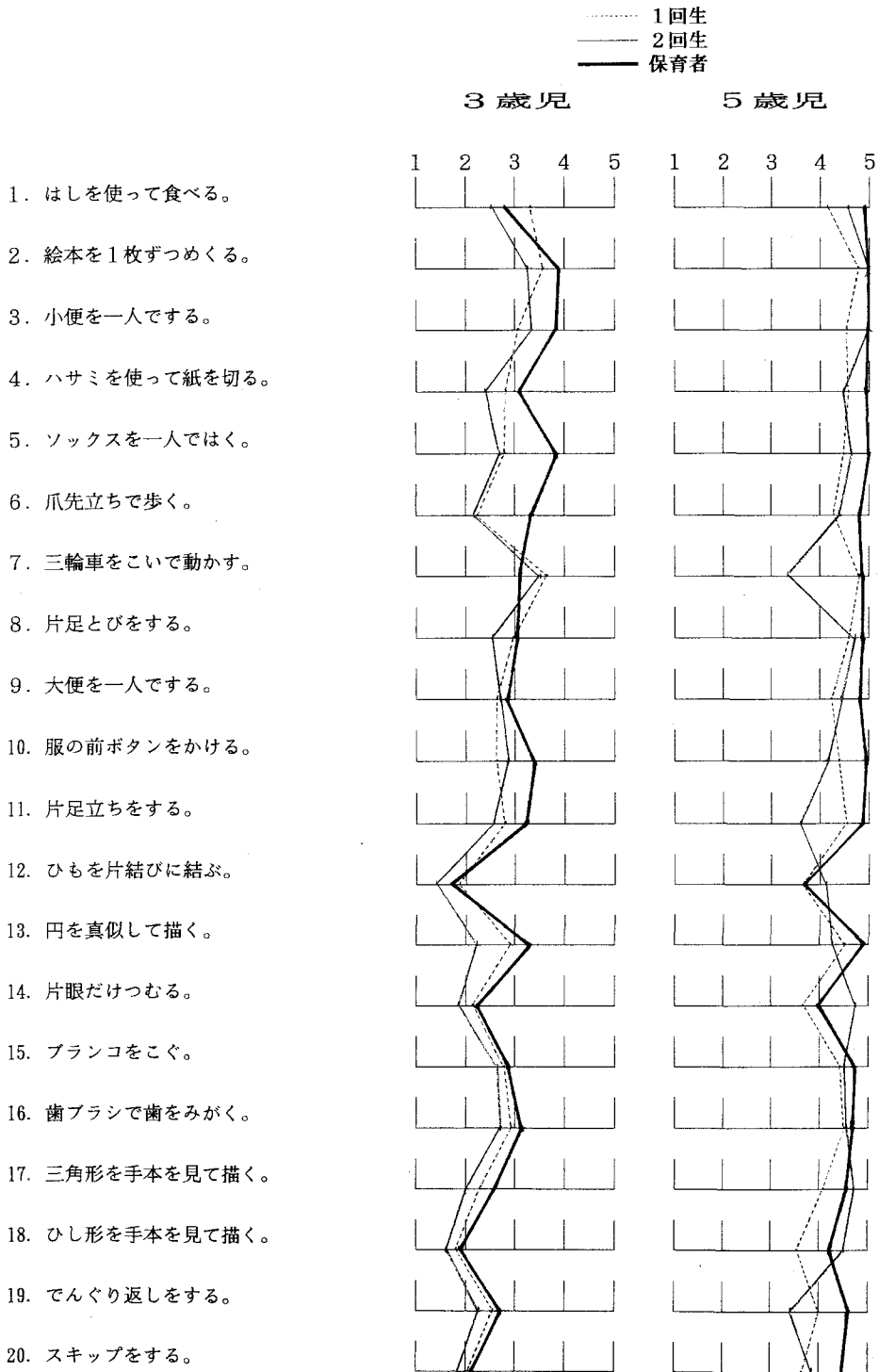


図 1 運動領域のプロフィール



図2 認知領域のプロフィール

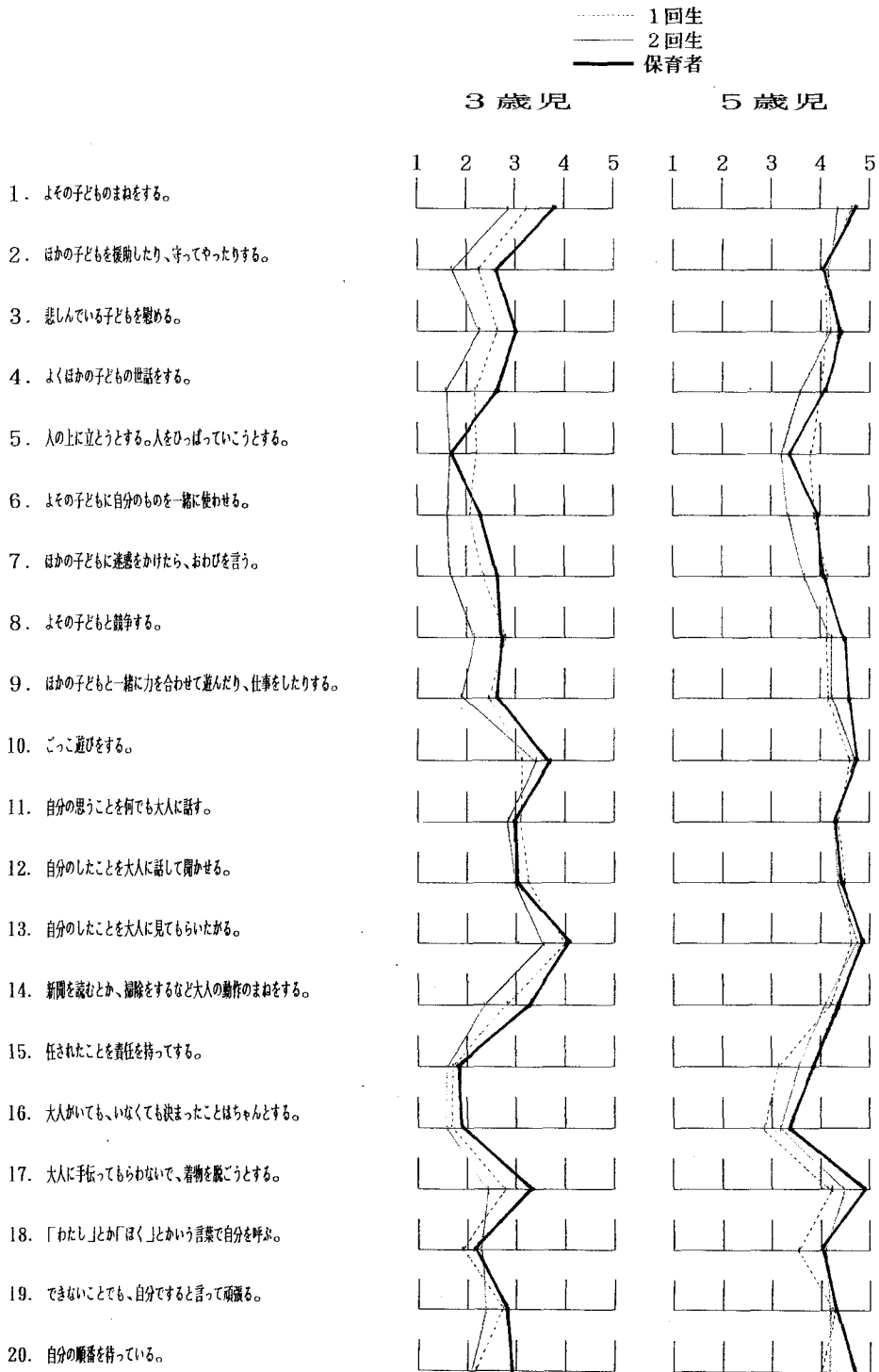


図 3 社会性領域のプロフィール

分析を行ったところ、年齢の主効果が有意であった。また、年齢と対象の交互作用に有意な傾向が認められた（それぞれ $F(1,74)=894.07$, $p<.01$; $F(2,74)=3.09$, $.05<p<.10$ ）。しかし、対象の主効果は有意でなかった。

年齢の有意な主効果は、全体に3歳児よりも5歳児のほうが認知面の発達が優れているととらえられたことを示す。次に、年齢と対象との交互作用に有意な傾向が認められたので、 $Mse=182.42$ を用いて下位検定を行ったところ、3歳児において、1回生と3回生の間、1回生と保育者の間に有意差があった（それぞれ $t=2.36$, $df=74$, $p<.05$; $t=2.05$, $df=74$, $p<.05$ ）。以上の結果は、3歳児・5歳児全体では、1回生・3回生・保育者の間に認知面の発達のとらえ方に差はないが、3歳児のみの発達についてみれば、保育者や3回生よりも1回生のほうが全体的に高い水準でとらえていることを示している。

図2には、幼児の認知面の発達を保育者や大学生がどのようにとらえているかをプロフィールで示した。3歳児についての全体的傾向をみると、「かなりできる」ととらえられているのは、⑨「自分の年齢を言う」、⑩「自分の名前を言う」項目だけで、他はほとんどが「だいたいできる」から「あまりできない」の発達段階にあると考えられている。特に⑤「自分の姓名(漢字)を読む」、⑥「かなで姓名を書く」、⑦「1日が何時間か言う」、⑧「今年が平成何年か言う」などは、「ほとんどできない」と考えられている。次に5歳児についての全体的傾向をみると、大部分の項目が「かなりできる」、「たいていできる」の発達段階にあるととらえられている。しかし、⑤「自分の姓名(漢字)を読む」、⑩「自分の住所を言う」、⑦「1日が何時間か言う」、⑧「今年が平成何年か言う」などは、5歳児でも困難と考えられている。

なお、各項目ごとに、保育者・1回生・3回生の平均得点を比較してみたところ、統計的に有意差(5%水準、1%水準)のあった項目は次のとおりである。

3歳児：④「自分の姓名(かな)を読む」(1回生>保育者)、⑥「かなで姓名を書く」(1回生>保育者=3回生)、⑩「自分の誕生日が何月か言う」(1回生>保育者)。

5歳児：⑦「1日が何時間か言う」(保育者>1回生=3回生)、⑧「自分の誕生日が何月か言う」(3回生>保育者)。

3. 社会性領域の発達について

表3に基づいて、2(年齢：3歳児、5歳児)×3(対象：1回生、3回生、保育者)の分散分析を行ったところ、年齢の主効果が有意であった($F(1,74)=508.35$, $p<.01$)。また、対象の主効果に有意な傾向が認められた($F(2,74)=3.01$, $.05<p<.10$)。しかし、年齢と対象との交互作用は有意でなかった。

年齢の有意な主効果は、全体に3歳児よりも5歳児のほうが社会性の発達が優れているととらえられたことを示す。次に、対象の主効果に有意な傾向が認められたので、 $Mse=183.15$ を用いて下位検定を行ったところ、保育者と3回生の間、保育者と1回生の間に有意差が認められた(それぞれ $t=2.05$, $df=74$, $p<.05$; $t=3.66$, $df=74$, $p<.01$)。さらに、1回生と3回生の間に有意な傾向が認められた($t=3.66$, $df=74$, $.05<p<.10$)。

以上の結果は、保育者は1回生や3回生よりも幼児の社会性の発達を全体的に高くとらえていること、同じ大学生でも、1回生は3回生よりも3歳児の社会性の発達を高くとらえていることを示唆している。

図3には、幼児の社会性の発達を、保育者や大学生がどのようにとらえているかをプロフィールで示した。3歳児についての全体的傾向をみると、「かなりできる」発達にあるととらえられて

いるのは、⑬「自分のしたことを大人に見てもらいたがる」の項目一つだけである。他には、「だいたいできる」の発達段階にあると考えられているのが、①、③、⑩、⑪、⑫、⑭、⑰、⑲の8項目で、残りの11項目が「あまりできない」の発達段階にあると考えられている。次に5歳児についての全体的傾向をみると、①「よその子どものまねをする」、⑩「ごっこ遊びをする」、⑬「自分のしたことを大人に見てもらいたがる」、⑰「大人に手伝ってもらわないで、着物を脱ごうとする」の4項目が、「たいていできる」の発達段階に近いだけで、他はすべて「だいたいできる」から「かなりできる」の段階でとらえられている。

なお、各項目ごとに保育者・1回生・3回生の平均得点を比較してみたところ、統計的に有意差（5%水準、1%水準）のあった項目は次のとおりである。

3歳児：①「よその子どものまねをする」（保育者>3回生）、②「ほかの子どもを援助したり、守ってやったりする」（保育者>3回生）、③「悲しんでいる子を慰める」（保育者>3回生）、④「よくほかの子どもの世話をする」（保育者>3回生）、⑦「ほかの子どもに迷惑をかけたら、おわびを言う」（保育者=1回生>3回生）、⑰「大人に手伝ってもらわないで、着物を脱ごうとする」（保育者>3回生）、⑳「自分の順番を待っている」（保育者>3回生=1回生）。

5歳児：⑥「よその子どもに自分のものを一緒に使わせる」（保育者=1回生>3回生）、⑮「任されたことを責任を持つてする」（保育者>1回生）。

以上、3歳児と5歳児について、運動・認知・社会性の三つの領域における発達のとらえ方を、保育者と大学生で比較検討した。本研究で設定した各領域20項目について調べた限りでは、どの領域でも全体的にみれば、3歳児は「だいたいできる」の発達段階に、また5歳児は、どちらかと言えば、「たいていできる」の発達段階にあると考えられていると言えよう。今回の調査では、4歳児は対象にしなかったが、4歳児の発達は上記の3歳児と5歳児の間「かなりできる」にあることはまちがいないだろう。このように、本調査により、おおまかではあるが、最近の幼児期後期における各年齢段階の発達の特徴がとらえられたことは興味深い。

次に、保育者と大学1回生、3回生について、3歳児、5歳児における運動・認知・社会性の発達のとらえ方を比較したところ、3歳児、5歳児とも、認知領域の発達には、三者のとらえ方の差はなかった。しかし、運動および社会性の領域では、保育者が大学1回生、3回生よりも幼児の発達を高い段階でとらえている。また、3歳児の発達については、大学1回生が認知領域で3回生や保育者よりも高く、さらに社会性領域でも、大学1回生が3回生よりも高くとらえている。

なぜこのような結果が生じたか考えてみよう。まず保育者は、日ごろ実際に幼児に接し、常にその発達に即した指導を行っている専門家であるから、今回の調査における3領域各20項目の発達については、最も信頼できるとらえ方をしていると考えてよい。いっぽう、大学3回生は、幼稚園教員養成コースで、既に幼児の発達に関しても多くの履修を行っており、4週間の教育実習も済ませているから、理論的にも、経験的にも、幼児の発達については、かなりの確かな判断ができるようになっていられると考えられる。しかし、教育実習期間中、実際に附属幼稚園3歳児学級で3歳児担当の経験が得られた学生は、わずか数名に過ぎず、大部分の3回生は附属幼稚園と県内協力幼稚園において4歳児、5歳児のみの保育を体験する。このような幼児と接する保育経験の差が、保育者と3回生の間の発達のとらえ方の差となって生じてきていると思われる。ただし、今回の調査対象である保育者には、幼稚園教師と保育所保母とが両方含まれている点に注意した

い。幼稚園の3歳児と保育所の3歳児とでは、少なくとも見かけ上の発達の様には相当な開きがあり、このような点をめぐり、しばしば研究会の席上で幼・保の保育者の議論にまで発展する。今後の調査では、幼・保における保育者の発達のとらえ方のちがいについて検討を加えたい。

ところで、大学1回生は、まだ専門のコースについての履修も始まったばかりであり、教育実習で幼児に接した経験もない。それゆえ、3歳児、5歳児という幼児の発達についての具体的な理解は不十分であり、多分に個人的・観念的なとらえ方しかできていないと思われる。保育者あるいは3回生との間に生じた発達のとらえ方の差は、1回生が、いわば根拠に乏しい推測で幼児の発達をとらえたことから生じたと考えられる。しかし、彼らも大学における専門コースのさまざまな領域の履修や実際の教育実習などをとおして、やがて幼児の心身の発達についても、よりの確な判断ができるまでに成長していくのではないだろうか。

引用文献

- 文部省 幼稚園教育指導書 フレーベル館 1988.
日本保育学会 保育学年報 1963年版 フレーベル館 1963.
日本保育学会 日本の幼児の精神発達 保育学講座9 フレーベル館 1970.
杉山道子 3歳児の育ち方と発達—10年の変化 家庭教育研究所紀要16、118—124、1994.

付記

本研究をまとめるにあたり、調査資料の分析・整理については奈良教育大学心理学専攻生 有川佳尚君・中村知美さん・廣田和恵さんのご協力を得ました。心から感謝します。